

研究ノート

名護方言の二つの音声資料の韻律分析¹

A Prosodic Analysis of Two Speech Recordings of Nago Dialect

児玉望

KODAMA Nozomi

はじめに

故ピーター・ラディフォゲッド博士の所属しておられたカリフォルニア州立大学の音声学教室のインターネット公開資料の中には、ラディフォゲッド博士ご自身や、指導された学生が提出したとみられる世界の言語の録音音声のデジタル化資料がある。この中の唯一の日本語の音声資料が、Okinawan として以下のページに収録されている 5 分 22 秒のデータである。

<http://archive.phonetics.ucla.edu/Language/RYU/ryu.html>

個人情報保護のため、本来録音に含まれていたとみられる調査者名とコンサルタント名は消去されており、1976 年 12 月に同大学学生が名護出身の女性の音声を分析して分節音の語例とアクセントの語例を提出したものである、という以外の情報はない。

このデータ（以下、UCLA 資料と呼ぶ）には、以下のような目を引く特徴がある。

- (1) 2 音節名詞のアクセントを 4 種の型に分けて分析している。
- (2) このうちの 3 種は、語内部で有意なピッチ下降のない上昇調である。

名護を含む山原方言のアクセントは、平山輝男(1937)や服部四郎(1937)を含む長い研究史をもつ。近年では沖縄言語研究センターの全集落調査を集約した名護市(2006)をはじめ、ウェイン・ローレンス(2005, 2009, 2010)、小川晋史(2010, 2012)、松森晶子(2009, 2012)といった、山原祖語や北琉球祖語を視野に入れた調査と論考が活発に展開されている方言群のひとつであるが、(1) の特徴をもつ方言はない。4 種の型のうち、下降を含む音形は、(RisingLevel or HighLow として分類されている)アクセントの語例 3 例(「音」「橋」「屋」)にのみ現れるが、いずれも、松森(2000b)が提案する琉球方言語彙 3 系列のうちの A 系列の

¹ 本研究は科研費(課題番号 2152041100)の助成を受けたものである。

語である。名護市(2006)の「やんばる言語地図」でも中央山原諸方言の中では A 系列の 2 音節語に下降が現れるものは稀である。

しかし、この下降調の出現例を除けば、「やんばる言語地図」で提示される、名護市名護地区の 2 音節名詞の調査データとほぼ矛盾のない型の対応になる。特に目を引くのは、この地区では、A 系列と C 系列の 2 拍 2 音節名詞が共に LH (低高) で実現することである。UCLA 資料はこの 2 系列をそれぞれ異なる型(RisingRising or HighHigh 対 LevelRising or LowHigh)として分析している。録音の F0 の推移を分析すると、第一音節の有声部が短い場合を中心に判別がむずかしい語例もある。LevelLevel or LowLow と分析される B 系列の語も第 2 音節末で上昇があるので、分析が正しいとすれば、この方言には 3 種類の上昇コントウアの弁別があることになる。語単独の発音では維持が困難とみられるこの弁別が保たれているとすれば、おそらく、助詞の接続や「句」の切れ目といった発話の環境に応じた変異のしかたが弁別に関与している可能性を考慮すべきであろう。

日本放送協会の『全国方言資料』には、1967 年に録音された旧名護町城(ぐすく)方言の談話音声資料が収録されている。この資料(以下、NHK 資料と呼ぶ)が UCLA 資料と近似する体系の話者の談話であると仮定すれば、UCLA 資料で欠けている助詞が接続した場合のピッチ形も含め、各アクセント型が文脈に応じてどのようなピッチ変異をみせるかの参考資料として役立てることができると考える。この研究ノートは、NHK 資料の全体の、有意味と考えられるピッチ変化に転記を施した上で、間投詞や助詞類を除く各語形のアクセント型を同定する試みである。聞き取りでわからなかった点(意味・音韻)の確認のために、コンサルタントとしてお二人の母語方言話者²にも UCLA 資料と NHK 資料を名護市城(ぐすく)公民館で聞いていただき、また、コンサルタントのご説明の発話自体も録音して参考にした。また、上記の近隣山原方言の先行研究に現れる語形や、沖縄言語研究センターが公開している『今帰仁方言音声データベース』の音声やアクセント分類も、アクセント型の同定にあたって参照した。ただし、解釈の誤りの責任はすべて筆者にある。この研究ノートの目的は、音声資料の分析によりアクセント型に対する仮説を立て、今後のこの地域のアクセント研究で明らかにすべき点を整理することである。

1、UCLA 資料の概要

音声データは、音韻分析の課題レポートの参照語例をまとめたものであるとみられる。

² 城在住の J.Y.氏(1934 年生まれ)と T.K.氏(1931 年生まれ)のお二人である。お二人とも、戦争末期に熊本県への疎開経験がある。収録日は 2014 年 2 月 10 日。

タイプ打ちされた音韻分析自体も、画像ファイルとして公開されている。収録場所は UCLA の音声学実験室である。第 1 部（母音）と第 2 部（子音）では分析者が英語で例示対象となる分節音（異音）を述べた後、コンサルタントが名護方言の単語を発音し、分析者により英語のグロスが読み上げられる、という構成である。

(1) 母音

「汗」「和えて」³「石」「青い」「牛」

母音例の 5 語は、リスト型の発音で英語のグロスを挟まずに再度繰り返される。

(2) 子音

「橋」「備瀬（地名）」「手」「井」「腰」「菓子」「ごみ」「元祖（仏壇）」「豆」「荷」「残念」「銀行」「飛ぶ」「早く」「船」「竿」「硯」「雑誌」「餅」「?」⁴「おお（間投詞）」「山」「終わる」

第 3 部が「超分節特徴」で、こちらは分析者が型の分類名を最初に述べた後、分析者が挙げるグロスに対してコンサルタントが単語を発音する、という構成になる。それぞれの型の最後で、母音の場合と同様な、リスト読み上げが行われる。

(3) 二音節語のアクセント

I. Rising Rising or High High (Word List では High Level とタイプ)

「飴」「かね（金属）」「袖」

II. Rising Level or High Low (High Falling)

「音」「橋」「昼」

III. Level Level or Low Low (Low Level)

「網」「島」「山」

IV. Level Rising or Low High (High Rising)

「傘」「麦」「白」「中」

(3)から一見して想像されるのは、分析者が日本語本土諸方言の「類別語彙」の知識を持っているだろう、ということである。I~IV は、それぞれ 2 音節名詞の 1~4 類に対応している。北琉球方言に関しては、2 音節名詞 3・4・5 類が「板」類と「息」類⁵に分かれて対

³ 母音 e 語例[ʔe:ti]。グロスは"mix"。「相手今帰仁 ʔee[ti]」かとも推測されるが確認とれず。

⁴ 子音 r の語例。[reigon]。音韻分析では「rannohana」とタイプされているが明らかに異なるため、ウェブ資料（語例 25）では空欄になっている。

⁵ 松森(2000b, 2009, 2012)では、3 音節名詞を合わせ、1・2 類を A 系列、「板」類・「鏡」類を B

応することが知られており、3類の3語はすべて「板」類、4類の4語は、「傘」「麦」が「板」類、「臼」「中」が「息」類である。コンサルタントの発音でも、「傘」と「麦」はIIIに分類すべきではないかとみられるピッチ形で現れている。分析者もIVの中でのピッチ形の食い違いに自覚があるようで、「臼」と「中」の2語については第1音節の母音が長いという音韻解釈を行なっている。これらの母音の音声自体は、少なくともUCLA資料の読み上げを含めた2回の実現に関する限り、長いとはいえない。「傘」と「麦」の第2音節の母音が長いのに対し第2音節のそれが短いことを、後者では「第1音節の母音が長い」と解釈しているようにみえる。

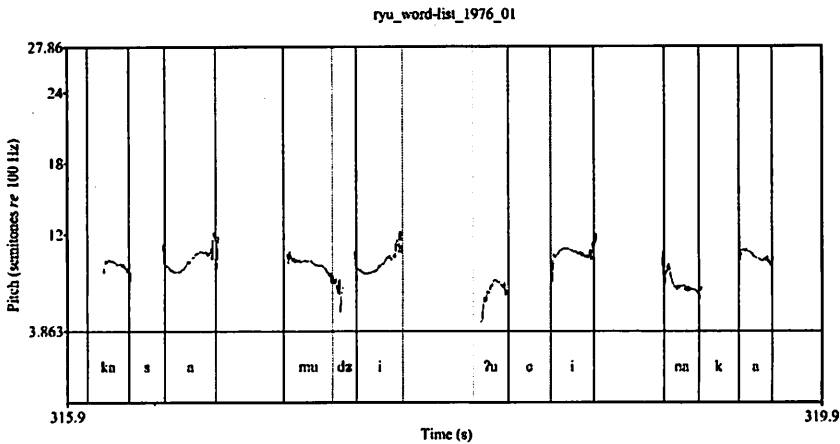


図1 「傘(b)」「麦(b)」「臼(c)」「中(c)」のリスト形

このことは、UCLA資料の分析者が、音声より「類別語彙」に引き摺られた解釈を行なっていることをうかがわせるものであり、この資料のアクセント型解釈の信頼度を著しく損なっている。しかし、コンサルタントの側で分析者の解釈に合わせるような音形の捏造が行なわれていると考える積極的な根拠はない。となると、問題になるのが、(間投詞「おお」を除けば)IIの3つの語例にのみ現れる「高・低」の語形である。この3語のうち、「橋」は(2)の冒頭にも現れるが、こちらは「低・高」である。

もしも、コンサルタントがすべての語例で自然な発音をしている、と仮定すれば、「橋」は「高・低」と「低・高」の複数の実現形をもつことになる。I~IIの型に分析されている単語はすべて松森(2009)のA系列の語であるので、「橋」だけでなくA系列の語のすべてあるいは一部にこのような音形の揺れがある、という可能性があるともみべきであろう。

系列、「息」類・「刀」類をC系列とする。以後、A~C系列の用語を用い、名隴方言でのそれぞれに対応する型をa~c型と表記する。但し、松森(2012)の用言のA/B系列の系列名/対応型は α/β とする。

実は、UCLA 資料の単語の発音の中には、ほかにも A 系列の語にのみ観察されるピッチ形の揺れ（下降の有無）がある。(2)と(3)で重複する「橋」「山」以外に複数の実現例の録音があるのは、(1)と(3)I~IV の各語の「リスト読み上げ」と「単独発音」の二例である。このうち、リストの最後の語例となっている A 系列の「牛」と「袖」は、この実現形の第 2 音節で、単独の発音では現れない急な下降調が現れる。これに対し、すべて B 系列となる(3)II のリストで最後に読み上げられる「山」は、前の 2 語と比べて全体としてピッチが低くなるが、下降調は出ない。(3)III のリストの最後の語は C 系列の「中」であるが、リストの読み上げで最後以外の語に系列を問わず現れる第 2 音節末のピッチ上昇こそ出ないものの、「牛」と「袖」のようなはっきりした下降は現れていない。一方、問題の(3)II の 3 語は、単独の場合と目立った違いがない。この 3 語全体が 3.3 秒余りの長さであり、2.5 秒以内の(3)I,III の 3 語はもちろん、(3)III の前 3 語と後ろ 3 語（それぞれ 2.7 秒）や、それぞれ長母音を含む(1)の 5 語リストの前の 3 語や後ろの 3 語（それぞれ 2.9 秒以下）と比べてもかなり長いことを考え合わせると、現れている音形が「リスト読み上げ」の形でない、とすべきかもしれない。

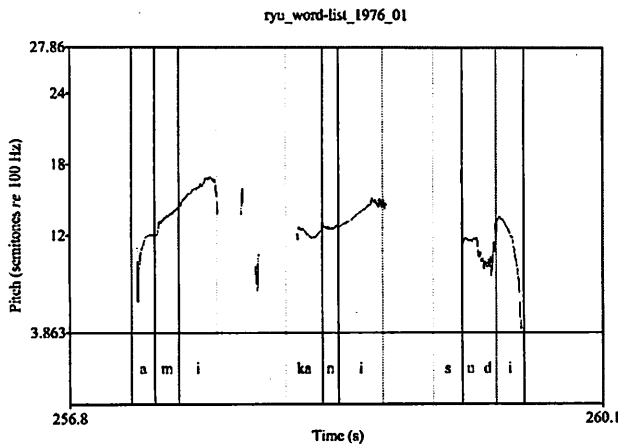


図2 「飴(a)」「かね(a)」「袖(a)」リスト形

この、A 系列の「リスト末尾形」のピッチは、F0 のピークが第 2 音節側にあり、「高」「低」で記述すれば、やはり「低・高」となるので、(3)II の A 系列 3 語の「高・低」とはかなり違った聴覚印象ではある。しかし、ピークの位置の違いを無視すれば、第 1 音節では急な上昇調、第 2 音節では急な下降調という点では似ている。

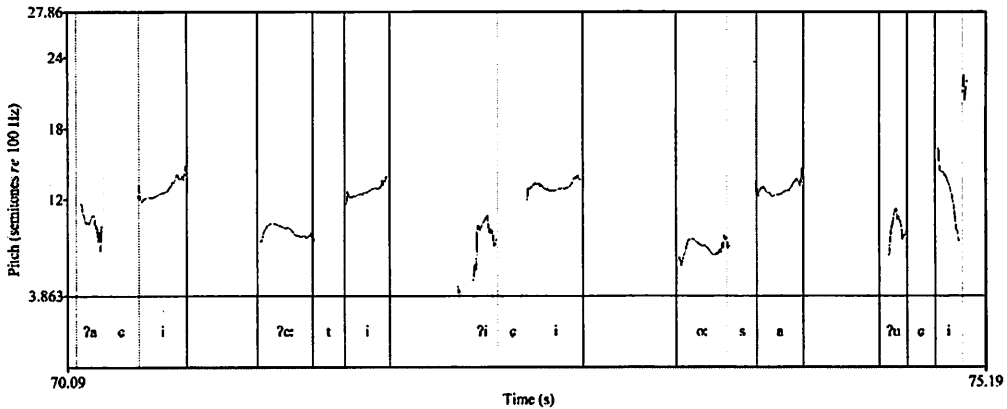


図3 「汗(b)」「和えて(β)」「石(a)」「青さ(c)」「牛(a)」リスト形

A系列の語の第2音節の下降調での実現は、名護市のアクセントとしてある程度予想されるものでもある。「やんばる言語地図」では、A系列の代表例である「鼻」の実現形の一つとして「バ[ナ]ー」を挙げている地点が、名護地区数久田、羽地地区川上、伊差川、久志地区大浦、嘉陽の5地点ある。このうち、羽地地区川上は、上村幸雄(1959)の琉球語広域での1・2音節名詞調査の地点の一つであり、このデータでは、1・2音節のA系列がすべて、単独では語末音節の下降調で実現するのに対し、助詞が接続する場合にはこの下降が消え、助詞が平進接続して2音節目以降が高い、という記述になっている(上村 1959: 128)。単語言い切りの形が出るか、リスト読み上げの末尾で出るかといった違いはあるにせよ、何らかのイントネーション的条件によって、A系列2音節語の2音節目のピッチが揺れるという点で共通点がありそうな現象である。

間投詞「おお」を含め「下降」がイントネーションによるものであるとすれば、UCLA資料の現れる語のアクセントの弁別は、上昇曲線の違いによることになる。このうち、金武方言と今帰仁方言の比較に基づく松森(2009)の系列分類に主として基づき、『今帰仁方言音声データベース』からも情報を補って系列所属を予測できる名詞は、以下のようになる。

(4) UCLA資料で系列所属が予測できる語

A系列：「石」「牛」「橋」「腰」「飴」「かね」「袖」(「音」「昼」)

B系列：「汗」「手」「豆」「荷」「竿」「山」「網」「島」「傘」「麦

C系列：「ごみ 今帰仁 [gu]mi⁶」「船」「餅」「白」「中」「菓子 今帰仁 kwaas[i]i」「元祖/

⁶ 引用データの表記はなるべく生かすが、上昇：[下降:]は統一し、他に使用している記号と衝突するものなど表記を置き換えたものがある。今帰仁方言データベースの喉頭化子音は斜字とし、長音音素表記の”R”は”.”に置き換えた。

仏壇 今婦仁 gwaN[su]「硯」

このうち、語単独の発音だけでも弁別が比較的容易なのは、B系列の語である。いずれも低くはじまり、末音節が長音化して音節末の上昇が観察されるものの、2音節語ではこの上昇までは音節境界を越えて低平となる。「やんばる言語地図」のB系列「木」「花」「雨」の項目からも、本部半島一帯で支配的な音形であることが見て取れる。

これに対して、A系列とC系列の2拍2音節から成る名詞は聞き分けがむずかしい。A系列のうち、第2音節の子音が有声でピッチ曲線が連続している「鮎」「かね」は、このピッチ曲線が右肩上がりで2音節を通じて上昇していることがわかる。これに対して、C系列で同じ条件の「ごみ」「船」は、第1音節冒頭の上昇がゆるやかには見えるが、この部分は全体の中では短く、第2音節にかけてはA系列と同様な上昇曲線となる。さらに、無声子音によってピッチ曲線が中断する語では、C系列の「餅」「中」のように語頭子音が有声で中断の前の有声部が長い場合に上昇のないコントウアが聴覚的にも確認しやすいことを除いては、第一音節のコントウアによる弁別は困難とみられる。ミニマルペアとなる「牛」と「白」⁷は、音節間の上昇幅がより大きいことが示差特徴とみられ、第1音節冒頭の短い上昇コントウアはむしろ後者のほうが急である。

おそらく弁別に関与しているとみられる特徴として、A系列の語例の中には、第2音節の母音が長めに実現しているものがある。特に、リスト読み上げの語例ではこの母音の長さが目立つ。(1)の読み上げでは「石」の第2音節は高平調である。(3)Iの読み上げでは、「鮎」「かね」の第2音節は上昇を続ける。ただし、単独の言い切りではこの長めは必ずしも明瞭ではない。「やんばる言語地図」のA系列「鼻」の地図では、名護市名護地区では「パ[ナー]」と「パ[ナ]」が混在しているが、母音の延長が自由変異的である可能性がある。

C系列で次末重音節をもつ「菓子」「元祖」(および「雑誌」と3音節以上の「硯 jindziri」(「井 dumburi」))は、次末音節まで低平調で語末音節のみが高く卓立する。低平調の部分は2拍2音節の場合と比べてかなり低いピッチとなる。また、名護城方言のコンサルタントによると「餅」「菓子」は2音節が共に長く、低平・高平の音節連続となる。

次末重音節をもつA系列には、UCLA録音では「銀行 dʒin̄koː⁸」と動詞の「終わる ʔwaNjuN」の緩やかな上昇調が相当すると思われる。語頭重音節のF0は上昇調であるが、聴覚的には高平調として聞き取ることもありそうな音形である。重音節を含むB系列では「残念」

⁷ 城方言のコンサルタントは[ʔusu]で、UCLA資料の[ʔuei]「白」を「牛」と判断した。

⁸ ただし、コンサルタントの「銀行 gin̄koː」はC系列の音形である。

がある。UCLA 録音の語例ではこの語全体が低平であるが、コンサルタントの発音 (dzaNniN)では語末の上昇が出る。

このほかの語例として、用言活用形あるいは副詞と推定される「和えて」 $\text{?e:}[\text{t'i}]$ 、「青さ」 $\text{o:}[\text{sa}]$ 、「早く」 $\text{pe:}[\text{ku}]$ があるが、いずれも名詞としては C 系列あるいは一拍付属語の接続した B 系列に対応する音形である。「青さ」の語形は、名護市名護地区の形容詞終止形 -haN/-saN （「やんばる言語地図」では許田のみ -saN ）と異なるが、繫辞 'aN の接続しない名詞化形としては可能であると考えられる⁹。

以上のような観察から、UCLA 資料の各名詞のアクセントについて、以下のような仮説を立てることができる。

(5) UCLA 資料の単純名詞アクセント仮説

A 系列：RH+(F) B 系列：L+R C 系列：L+\$H

\$は音節境界位置で、C 系列では H（高平調）の開始される位置（末音節）の指定が必要になる。A 系列の語頭と C 系列の語末の R は、一音節未満の上昇調である。H+と L+は語の長さに応じて可変長の、高トーン／低トーンの持続である。A 系列末尾の(F)は、特定のイントネーションのみで実現する語末の下降調を表わす。(3)II の高・低の音調は、実在するとすればこの種のイントネーションの F の長い(第 2 音節全体に及ぶ)実現だと考える。

この仮説では、2 拍 2 音節の A 系列名詞は R\$H、C 系列名詞は L\$H として解釈することになる。しかし、具体的な音声は似たものになる。たとえば、語例の中で地名の「備瀬 $\text{bi}[\text{se}]$ はどちらの系列か判断がつかない。また、動詞「飛ぶ」 $\text{tu}[\text{buN}]$ も、この方言の動詞形にも C 系列の対応形があるとなれば、判断に困る音形である。

先行研究のある近隣の方言アクセントの中でも、この音節構成で A 系列と C 系列の型の区別が、助詞接続のある文節環境も含め、失われているとみられる記述を散見する。以下では、この区別があるかないか、あるとなればどのように解釈されているかに特に注目して、山原諸方言の先行研究を概観し、そのうえで(5)の仮説を談話資料を用いて検証するに際し、留意が必要とみられる点をまとめる。

⁹ NHK 資料で $\text{waka:}[\text{ha}]ru$ 「若い」、城方言コンサルタントの発音で obusaN 「重い」、 $\text{jpe:}[\text{haN}]$ 「早い」など。

2. 山原諸方言アクセントの概観

2.1.2 拍2音節名詞でA系列とC系列の型が区別されないとみられる方言

2.1.1. 伊江島方言

「やんばる言語地図」によると、2音節名詞のA系列とC系列が共に低・高で出る方言は、名護市名護地区周辺と伊江島である。生塩(1986)の記述によると、伊江島では両系列は典型的には次のような音形をとるとみられる。

(6) A系列：前から2拍目がH

C系列：2拍語では最後の拍、3拍以上の語では後ろから2拍目がH

このため、2拍名詞(LH)と3拍名詞(LHL)で両系列は同じ音形となる。

助詞はいずれも低接する。終止形「～サ」の2拍形容詞(LHL)も型の区別がない。ただし、2拍目が長音音素の3拍2音節語は、A系列でHLL([ha:]ra「川原」)、C系列でLHL(ha[:]ra「瓦」)となる¹⁰。また、複合語形成ではA系列とC系列で異なるふるまいをする。

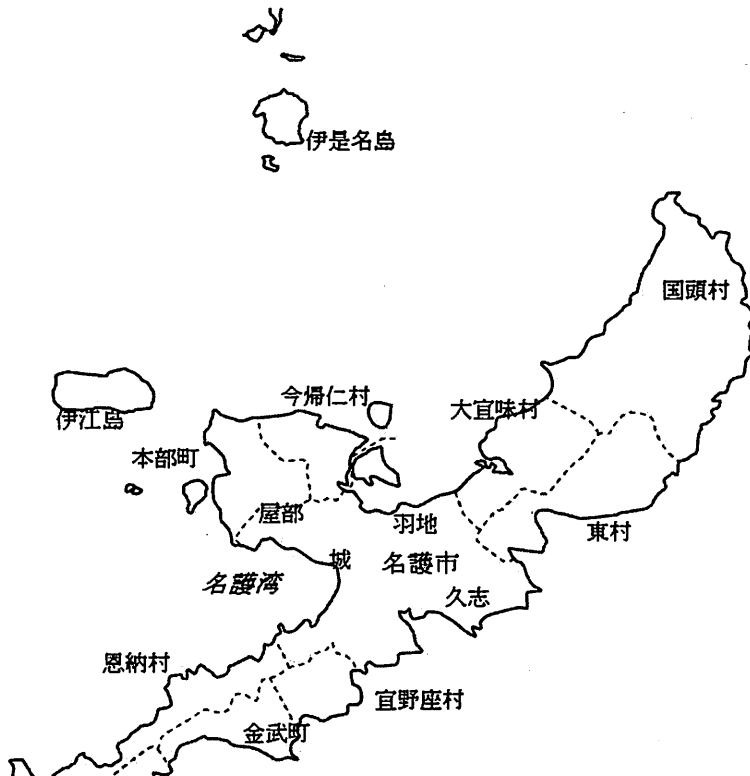


図4 山原地域

¹⁰ 名詞の語例は生塩(1986: 25)。形容詞のうち、「青い」は o[:]sa(同左 p77)であり、UCLA 資料の o:[sa とは異なる。

2.1.2. 大宜味村田嘉里方言

ローレンス(2005: 78) は、複合名詞を除く名詞のアクセントの3型を以下のようにまとめている。a,b,c音調はそれぞれA,B,C系列を含むとみられる。

- | | |
|------------|------|
| (7) a音調：全高 | H+ |
| b音調：語末拍高 | L+H |
| c音調：語末二拍高 | L+HH |

助詞は高く続く。2拍名詞(1音節名詞を含む)では、a音調とc音調は共にHHとなる。ただし、2音節名詞で、A系列では2音節目、C系列では1音節目の母音が長音化した語は、A系列H\$H、C系列LH\$Hとなり、区別が維持される。C系列の第1音節は上昇調となる。また、複合語形成ではA系列とC系列でふるまいが異なる。

2.1.3. 大宜味村津波方言

ローレンス(2009)が同村4方言の比較、小川(2009)がこの方言のみの記述を行っている。大宜味村でもっとも名護市羽地地区寄りの位置にある集落である。高平調と上昇調の二型とする小川(2009: 132)の記述では、2拍名詞についてはA系列・C系列ともに高平調となる。長母音化のある2音節名詞を含む、3拍以上の名詞では、B系列とC系列が上昇調に統合するが、3拍以下の上昇調は語末拍のみが高く、4拍以上の上昇調は、次末拍が短ければここから、長ければ語末拍のみが高い。伊江島方言C系列と津波方言上昇調の共通点は、語長に応じてHの位置指定が変わる点である。前者では2拍以下、後者では3拍以下で語末拍のみのHとなる。

ローレンス(2009)ではA系列の「桃」「粉」「水」「布」「蟹」「丘(もり)」など語頭有声子音をもつ語がb音調(上昇調)に移行していることを述べ、大宜味村と国頭村に共通するイノヴェーションであると解釈している。小川(2009:132)は、C系列の「松」「蚤」なども高平調ではなく上昇調になることを述べる。これは、A系列とC系列が合流した時点では上昇調であり、語頭有声子音をもたない語のみが高平化した、という解釈をも許すように思われる。ただし、ローレンス(2009)ではC系列「鍋」は高平調。小川(2009)も、Appendix4(類別語彙の一覧)で上昇調、Appendix2-1(名詞のアクセント)では高平調という食い違いがかなりある。A系列にのみ起きる変化であれば、A系列が上昇調から高平調に変化して次末拍の高いC系列と合流した可能性を示すと考える。

2.2. 2拍2音節名詞でA系列とC系列の型が部分的に区別される方言

2.2.1. 伊是名島仲田方言¹¹

上村(1959)は、1・2音節名詞(「鼻」「風」「腰」「魚」「音」「橋」「川」「人」「花」「雲」「年」「息」「海」「船」「今日」「雨」「影」「婿」「桶」「血」「帆」「名」「葉」「木」「田」「目」「葉」「豚 ?wa:」)に限定して単独の形と助詞付きの形を比較する多地点調査である。仲田方言の記述では、2音節名詞C系列が3つに分裂している。

2拍2音節の「息」「海」「影」は、1拍助詞の音調を括弧内で表わすと、A系列と同様、HSH(\$H)となる。2拍2音節のうち、「船」は、助詞が低く接続するHSH(\$L)となる。第1音節の母音が長音化する「婿」と「桶」は、L\$H(\$L)である。2拍1音節C系列の「今日」はH(\$L)であり、A系列「血」「帆」「名」「葉」のHS(H)とは区別される。助詞が低接するのはC系列のみであり、この方言では語末の助詞の接続が型の弁別に参与しているとみられる。

2.3. 2拍2音節名詞でA系列とC系列の型の弁別に助詞の接続が関与する方言

2.3.1. 名護市羽地地区川上方言

名護地区と同様に2音節名詞のA系列とC系列が共にL\$Hにはじまる方言である。すでに述べたように上村(1959)の記述があり、単語単独では、2音節語ではA系列のみ第2音節に下降調が出る(L\$HL)。1音節語では、A系列が低くはじまる下降調(ML)、C系列「今日」「豚」が高くはじまる下降調(HL)である。

助詞「が」が接続した形では、助詞が高いA系列L\$H(\$H)とB系列L\$H(\$H)に対し、C系列は助詞が低いL\$H(\$L)となる。第1音節が長い「影」「婿」でも、短い「息」「海」「船」「桶」でも名詞語末音節のみが高い(L\$H)。1音節の「今日」「豚」では、下降調に助詞が低く続くHLS(L)である。

ただし、「やんばる言語地図」では、この地点では1音節B系列の「木」や「婿」でも単独形で下降調が現れる。これらはこの地点に特異的な音形であるが、一方、「松」「骨」が2拍2音節でH\$Lという音形である点は、名護市羽地地区南部の他地点と共通である。

2.3.2. 名護市屋部地区安和方言¹²

平山(1937)で分析されている方言である。この方言で、A系列2音節名詞が「殆ど全平に近い」方言であるとする記述は「やんばる言語地図」と一致する。B系列(II)とC系列(II)

¹¹ 松森(1998)にもこの方言の2音節名詞のアクセント記述があるが、C系列を3拍名詞に限っており2拍2音節名詞のデータがない。

¹² 松森(1998)にもこの方言の2音節名詞単独形のアクセントの記述があるが、2拍2音節名詞に関してはA系列がL\$H、C系列がH\$Hと平山(1937)とは逆で、第1音節が長母音化したC系列のみL\$Hという記述である。

の弁別を、単語単独では共に「下上」L\$Hであるのに対し、B系列はHが助詞「ぬ」に移動する「下上甲」L\$L(\$H)、C系列はHが移動しない「下上乙」L\$H(\$L)とし、助詞接続の違いを強調した分析となっている。

2.4.2 拍2音節名詞でA系列とC系列の弁別が維持されている他の方言

2.4.1. C系列次末音節または次末拍が高い方言

2.2.と2.3.で取り上げたC系列で助詞が低く接続する名詞は、いずれもHが語末音節のみに現れる語形で、例外は伊是名島仲田の「船」だけである¹³。

これに対して山原北部では、2.1の諸方言を含め、C系列の次末拍が高い方言が多く、2拍2音節ではHLとなり下降のないA系列と区別されるとみられる。上村(1959)の国頭村奥と半地の2地点や、松森(1998)の国頭村奥と与那、東村川田もそのような体系であると解釈できる。上村(1959)では1音節目が長いC系列2音節語は、奥では語末拍(L\$H)、半地では次末拍(LH\$L)が高い。半地ではB系列の語末拍が高く、助詞が低く接続するL\$H(\$L)となる。松森(1998)の川田でも半地と似た音形が記述されている。C系列でも語末広母音の延長がある今帰仁方言では、この延長はHの位置に影響せず、次末拍ではなく次末音節が高くなる(「浜」[pa]maaなど)が、「猿」saa[ru]uのように次末音節も長い場合には次末拍が高い。

どの語でどの音節が長いかと、1音節目が長い場合にどんな音形になるかは方言間で差が大きいことは「やんばる言語地図」のC系列の3語(「婿」「骨」「松」)の地図からもうかがわれる。

2.4.2. 金武方言

山原南部の金武方言は、松森(2009)によれば、C系列の語末音節1音節が高いタイプであるが、この語末のHは、助詞が接続すると助詞の側に移る。語末ではなく文節末との関係でHの位置を指定する「文節アクセント」として解釈することも可能である点が、中北部大部分のC系列の型とは異なっている。

A系列は、語頭から、助詞を含むか含まないかに関わらず最大で文節頭の3モーラの高平調で、それより長ければこの位置で下降するという指定があるが、これも「文節アクセント」的である。一方、B系列はこの方言では語末音節が低くはじまることで特徴づけられるが、2音節名詞は、単語単独では現れる語末母音の延長と語末モーラのHが、助詞で終

¹³ 上村(1959: 127)の国頭村奥方言のデータでは「船」は1音節化した語形 çiN で現れ「今日」「豚」と同じ型となるが、関係があるか。

わる文節では共に現れず、文節が低く短く終わる。B系列3モーラ3音節名詞では、語末母音の長さは助詞が接続されても維持されるが、文節末の助詞は伸びず、文節末まで上昇がない。これに対し、B型1音節名詞は、山原中北部の方言の多くと同様、単独では音節内部で、助詞があれば語末の音節境界で上昇し、助詞がHとなる。

さらに、B系列とC系列の2音節名詞は、いずれも語頭の母音が長母音化し、Hが語頭から、B系列では義務的に2モーラ、C系列では任意に1モーラ現れる。3音節の名詞の語頭短母音は長母音化しないが、2音節名詞と同じ条件で語頭のHが現れる。つまり、この方言は、2モーラ以下の音形では下降が現れないが、3モーラ以上の名詞ではすべての系列で下降が置かれうるということになる。

2.5. 山原諸方言のアクセントに関する留意事項

UCLA 資料からの仮説(5)は、3拍以上の長い語に関するデータを十分に反映していないし、また、名詞単独形のみに基づくため文節内での実現に関してはまったく情報がない。これらを含む談話音声データのアクセント分析を行うに際して、近隣諸方言の先行記述から留意が必要と予想される点をまとめる。

(8) 山原方言のアクセント体系のヴァリエーション

- a. A系列：常に非下降か、語長あるいは文節長に応じてどこかで下降するか。
- b. B系列：文節内でHが現れる位置はどこか。(語末、助詞頭、文節末)
- c. C系列：Hが現れる位置は語あるいは文節の次末(拍・音節)か、末(拍・音節)か。

語長あるいは文節長に応じた違いはないか。

- d. B系列・C系列の語頭隆起がないか。

(8)a.は、ローレンス(2010)でも論じられている。伊江島のA系列では語の2拍め、金武では文節の3モーラ目までが非下降の限界であるとみられる。これに対して、非下降が継続する場合は、語の内部までか、助詞を含む文節か、あるいは(東京方言の平板型のように)次のアクセント核までか、といった違いを明らかにする必要がある。

B系列は、金武のように語頭隆起を起こしている場合以外は低起とみられ、Lが続いた後でHが現れる方言が多いが、このHが文節内でも語末音節に現れる国頭村半地や大宜味村田嘉里のようなタイプと、Hが助詞側に現れる方言があるとみられる。助詞側に出る場合に「文節アクセント」としてHが文節末に出るといえるためには、2音節以上の助詞を含む文節の実現例が必要である。伊江島方言のように、3音節以上の名詞ではHが語末音節側に出るといような、語長による場合分けが必要とみられる方言もある。

(8)c.は、2.1.~2.4.の議論を踏まえている。B系列とC系列が共に「低起式」であるよう

な方言では、(8)b と(8)c の関係にも注意が必要である。金武方言を除くと、C 系列は「語アクセント」的な、語末からの位置に言及する先行研究が多いが、B 系列との弁別が「語アクセント」としての位置の対立とみなしうる方言とそうでない方言、さらに、これらの 2 系列の弁別が語長によっては失われる方言（大宜味村津波）もある。

今帰仁方言の B 系列と C 系列の弁別については、見解が分かれる。小川(2012)は、今帰仁方言の C 系列を、2 拍 2 音節名詞(Rhythmic Lengthening を伴う H\$L)及びこれと同様の頭高音形を前部にもつ複合語とに限定し、それ以上の長さでの B 系列との対立を認めない。これは C 系列 2 拍 2 音節以外のこの方言の下降を非弁別的として「昇り核」による対立とする立場を反映する。今帰仁方言の B 型は、4 モーラ目があればこのモーラを含む音節に昇り核としての H をもつものとして定義される。一方、松森(2009)は、3 音節では末音節 H が短いもの(「島 pataa[ki])を今帰仁方言の C 系列、長いもの(「鉄 pasaa[mii])を B 系列として区別し、金武方言との対応を説明する。長い末音節で下降のあるもの(「子供 2 waraa[bi]i)は B、C として分類を保留する。

(8)d は、2.4.2. で説明した金武方言のほかに、ローレンス(2009)の大宜味村津波方言の記述に現れる。ただし、これらの「低起」系の型の語頭に現れる H にはいくつかのパターンがある。金武方言の二つのタイプは、A 系列との弁別を保つためには A 系列と同様に語頭からの長さが固定長になるはずである。これに対して、津波方言の場合は、語末側の上昇の前に一定の L を残す形で、語頭からの長さは可変的である¹⁴。

2.6. 山原方言の連文節音調の分析に関する留意事項

談話資料の音声分析は、特に「句」の内部での連文節環境での音調の分析に有効である。文脈から「句」の構造が判断しやすいからである。山原方言のように「高起/低起」の式体系が問題になりうる方言の記述では、連文節構造に言及されているものもあり、談話資料を聞く上での参考になる。

2.6.1. 大宜味村田嘉里方言

ローレンス(2005)は、この方言の音調を低音調(L)と高音調(H)で記述できるとする立場であり、基本的には連文節でも L と H に応じたピッチ配置となる。語頭は、a 音調(A 系列)と 2 拍の c 音調(C 系列)が H, b 音調(B 系列)と 3 拍以上の c 音調が L であり、高起と低起の別があるといえる。語末はどの音調も H で終わり、助詞は名詞に「名詞の音調を変えない

¹⁴ 児玉(2012)では、種子島と屋久島の諸方言の分化をうまく説明するためには、L の連続だけでなく H の連続においても固定長の語頭隆起を仮定すべきであると主張した。この考えに立てば、(8)a. で取り上げた A 系列の固定長の非下降も、語頭隆起と解釈しうることになる。

で、高く付く」ので、文節末音節は H となる。次文節が低起であれば、(9)のようにピッチ下降があり、高起であれば平進となるのが予測される音形である。しかし、この予測に従わず、後続の（高起の）文節が低くはじまる例として、(10)のような文例が提示されている(ローレンス 2005: 69 による)。

- (9) $\phi u[u-nu]nee[N]$ 「運(b)がない(β)」
 $[sii-nu]nee[N]$ 「耐寒力(a/c)がない(β)」
- (10) $[gee]sun$ 「反抗(a/c)する(α)」
 $[gee-ru]sui$ 「反抗(ぞ)するか」
 $ki[N]kiiN$ 「服(b)着る(α)」
 $[naa-nu]naa-ja$ 「あなた(a/c)の名前(a/c)は」
 $[zaa-nu]cuu-ga$ 「どこ(a/c)の人(a/c)ですか」

(10)は、この方言の各型が、東京方言の無アクセント型のように「句」の内部では次のアクセント核まで文節境界を越えて平進するのではなく、文節末に下降境界を挿入できることを示しているようである。

2.6.2. 今帰仁方言

小川(2012: 22-23)は、今帰仁方言でピッチ下降ではなくピッチ上昇が弁別に関与する証拠として、「茶碗(A)洗いなさい(A)」や「水(A)飲みなさい(B)」の二つの連文節で、後半の文節の動詞の側の上昇が保存されなければならないことを示している。ただし、この例示に関しては少し問題がある。まず、これらの連文節は、たとえば目的語が定と解釈される場合のように、二句の構造で現れることもあり、保存されるピッチ上昇が「句頭」の特徴である可能性が否定できない。もう一つは、後続文節の上昇だけではなく、前文節末の下降も保存されている点についての分析がないことである。保存されなければならないのが語頭の下降であるのか語内部の上昇であるのか、あるいはこの両方が関与するのかは、この例だけではわからない。

服部四郎(1937:671-672)は、今帰仁村与那嶺方言で A 系列のピッチ上昇が保存されない例として連文節構造を挙げている。

- (11) a. $p^h a[na:]$ 「鼻」 $p^h a[na:]nu$ 「鼻が」
 b. $p^h ana[:]$ 「花」 $p^h ana:[nu]$ 「花が」
- (12) a. $[?ja: p^h ana:] mju[n]$ 「君(A)の鼻(A)を見る(B)」
 b. $?ja: p^h ana[:] mju[n]$ 「君(A)の花(B)を見る(B)」
- (13) a. $hu[nu p^h ana:] mju[n]$ 「この(A)鼻(A)/花 (B)を見る(B)」

b. hunu p^hana[:] mjuŋ

「この(A)花(B)を見る(β)」

(14) a[ri:ga p^hana:]ja h^h[ka:ɸe]ŋ

「彼の鼻(A)/花 (B)は赤い(α)」

(12)~(14)の文頭の連文節は、いずれも A 系列の前文節が、(助詞を伴う場合はその下降を失って) 平板に後の文節に接続する例である。(13)a.と(14)で後文節のアクセントによる対立を失っている点では、複合語形成を思わせるラジカルな音形の変化である。

(12)b.と(13)b.の B 系列の「花」は、大宜味方言(9)のような文節頭の下降をもたず、むしろ先行の 2 モーラ全体のピッチを下げているように見える。小川(2012: 131)は、今婦仁方言を「(山原祖語)から式の特徴が失われた方言」と推測しているが、大宜味方言との違いは、この「式」の特徴を失ったことと関連付けられるかもしれない。

3. NHK 資料の分析

NHK 資料は、現名護市(収録当時名護町)城方言の男性 1 名、女性 3 名の話者による談話資料である。話し手はいずれも 1885 年あるいは 1886 年生まれで、いっしょに録音を聞いていただいたコンサルタントとは 50 年近い世代の開きがある。二つの「自由会話」(「わかれ遊び」「いるか漁」)と、8つの「あいさつ」(「朝」「夕」「道で」「買い物」「送り」「不祝儀」「祝儀」)が、それぞれ男女の対話として収録されている。自由会話と場面設定による対話という構成は『全国方言資料』に共通するが、名護のデータの場合、自由会話も場面設定による寸劇になっているとみられる。全体の長さは 9 分 30 秒程度である。テキスト全体のローマ字転写を 950 の「語形」に分割した上で、間投詞と終助詞を除く自立語のアクセント型を同定することを試みた。重なりを除く語彙数は、名詞・代名詞・数詞が 130 程度、動詞・形容詞が 70 程度、副詞が 30 程度である。

3.1. アクセント解釈の仮説

アクセント型は、複合語を除けばほぼ UCLA 資料による仮説(5)によっておおよその見当をつけることができる。さらに、談話資料の中での文節でのアクセント実現を考慮して、名詞の系列を以下のように修正した。]は音節間の下降、[は上昇を表わす。用言(動詞・形容詞)は α 系列と β 系列に分類でき、β 系列は活用に応じて名詞の B 系列または C 系列に相当する音形で現れる。"#は付属語との間の語境界を表わす。

(15) NHK 資料に基づく単純名詞各系列の仮説

A 系列 (R+)H+(F+)

B 系列 助詞接続形]L+#[.. 単独形]L+R#]

C 系列 1 音節語 H#].. 2 音節以上]L+\$H#]..

(15)は(5)との対応を考慮して、高音調の H と低音調の L を用いたが、有標性はこの二つ

の間で異なる。B 系列と 2 音節以上の C 系列及び β 系列用言形の語頭に現れる L+は、全体のピッチに関わらず先行する音節間ピッチ下降を伴う。たとえば、動詞「なる」の否定形、naraN ~ nara:nu の実現形は、補助動詞的な「～てはならない」「～しなければならない」の形で 6 回出現するが、すべて先行部からのピッチ下降を伴う。同じ動詞の他の活用形 3 例 (]naQt'aN 「なった」、]na[t'i 「なって」、]naru]wa 「なりなさい」) も同様である。

- (16) a. (])ta[da:] 'i[ze:]nara:[nu: 「ただ(c?)行っては(a)ならない(β)よ」 p237
 b.]ha[k'u 'iQk'aNk'ine:]nara[N]sa 「早く(b)行かなければ(a)ならない(β)さ」 p254
 c.]junutu[si]na[t'i 「同年輩(c?)[に]なって(β)」 p256

これに対して、A 系列は、これに対応するような一貫した語頭部の上昇をもたない。

- (17) [[nu:] 'ut'a:garu su[ru 「何の(b)歌(a)を[ぞ]する(a)か」 p241

「何」nu: は、「なぜ」]nuN[ga のような関連語形やコンサルタントの発話例(「何が」]nu:[ga など) から B 系列の名詞の助詞接続のない形であると推定できる。聴覚的には高起の印象を与える後続の音節内部の上昇を["で表記する。この音節内部の上昇の後、後続の a+a の連文節は、全体として低平調で現れており、H とは言い難い。

- (18) a. [[siNpai suN]do:]ja 「心配(a)し(a)ていますよ」 p260
 b.]mi:[me:] su:waru]aiN [se: 「見舞い(c)する(a)べきだ(β)ろう」 p255
 c.]dak'u[:] su:su [ga]: 「楽(b)し(a)ているん でしょう」 p256

また、A 系列の動詞「する」は、先行の名詞の系列に応じて助詞と似たピッチ推移が冒頭に現れる場合(18a, 18b)と、低く接続する場合(18c. cf.]raku[:sici 「楽して」 p256)の 2 通りの実現形が観察される。むしろ、A 系列は「無契機」の型であり、句頭の上昇(R+)、句内の先行文節末の下降契機(I)や上昇契機(I)、句末の下降(F+)といった、外的な要因でピッチ形が決定される型だと考えたほうがわかりやすいピッチ実現形となる。

3.2. 「文節」のアクセント形

助詞の接続に関して、B 系列と C 系列は、それぞれ助詞との間に上昇契機があるか、下降契機があるかによる弁別が観察される。これに対して、A 系列の場合は、助詞への平板接続が(句末の場合を含め)典型的ではあるが、文節末のイントネーションによっては助詞が低い場合もある。

- (19) Ngati 「方向格」の接続例

- u[ciNga]t'i 「家(a)に」 pp251-2
]p'uroN[ga]t'i 「島(b)に」 p252
]p'u[niN]gat'i 「船(c)に」 pp244-5

me:N]gat'i

「前(c)に」 p248

(20) mu[ra:]ja]suri[ru]waN

「村(a)は集まり(b)という(α)から」 p258

(19)a では 2 音節の助詞の後半部が下降調である。後述するように、この種の 2 音節助詞や助詞連続の下降は A 系列以外にも出るが、コンサルタントの発話では A 系列の名詞の場合は 1 音節の助詞でも(20)のような文節末の下降が頻出し、単純に助詞が高いか低いかだけでは、A 系列であるか C 系列であるかを判断することができない。むしろ、C 系列の語末の]の実現で特徴的なのは、助詞が下降調で現れないことのようなのである。このため、C 系列の語に後続する助詞は、ピッチがあまり低くならない。たとえば、山原各方言で 1 音節 C 系列で現れる代表的な語である「今日」は、NHK 資料の中で「今日は」[ku:]ja の音形が 11 回出現するが、いずれも二つの音節が共に平調に聞こえ、ポーズの前の語例のようにこの助詞が長めに実現するときははっきりと平進のコントウアが観察できる。また、2 音節以上の C 系列の語では、助詞を伴う場合、語末の H に先行する L と比べて、助詞のピッチがほぼ必ず高いといってよい。

アクセントに関する性質は、助詞によって異なる。単独で音節を構成しない助詞 N「も」は、名詞単独の場合と音形が変わらない。この副詞を含め、N にはじまる助詞に先行する語末母音は短い。(21)c は強調的な長めであるとみられる。

(21) a.]e:[zju: 「友達(c)」 p239]e:[zjuN 「友達(c)も」 p238

b.]ja:[zi 「家(b)に(行って)」 p254 [[ja]Nt'i¹⁵ 「家(b)で」 p244

c. [[nu: 「何(b)」 p255]nu[:N 「何(b)もかも」 p244

引用の助詞 ri「と」は、しばしば後続の動詞 j'uN「言う」の活用形と融合して ru-/ri-の形で現れるが、この場合には先行の名詞は単独形で現れることができる。単独形か接続形かの揺れが、自由会話 1 の頻出語彙「別れ(b)」の実現形で観察される。

(22) a.]waka:ri[:]ri]munu[: 「別れ(b)という(α)もの(b)を」 p236-7 m.

b.]waka:ri[ri]munu[: 「別れ(b)という(α)もの(b)を」 p237 f.

助詞 ja「は」は、先行する名詞の語末母音と融合して e:として実現する 경우가多いが、この場合も語単独の場合とのアクセントの違いは観察されない。

以下で、先行する名詞のアクセントに応じて助詞のピッチの実現が異なると解釈できる助詞の実現例をまとめる。(23)は、取り立て助詞 ja/e:「は」、(24)は、格助詞 ga「が/の」及びこれに取り立て助詞 ru/ja が接続するもの、(25)は、格助詞 nu「が/の」の出現例を、

¹⁵ コンサルタントは安定して]jaN[t'i。

推定されるアクセント型に応じて分類した。(26)は、その他の助詞を含む文節の例である。

(23) a 型. [[de:ja 「代金は」 p257]j'a:ja 「おまえは」 pp254-6,259,262 mu[ra:]ja 「村は」 p258
[[na:ja 「あなたは」 p244 [[po:nuk'uja 「大兼久は」 p246 u[re:, 'urija: 「それは」 pp239,
254

b 型.]gusiku[ja 「城は」 p248]'ikega[ja: 「男は」 p239 (])sat'a:[ja 「沙汰は」 p260]tusui[ja
「年寄り」 p253 'uQpi[ja]: 「少しは」 p254]wa[ne:,]wane[: 「私は」 pp243-4

c 型.]huN[du]ja 「今度は」 pp248-249, 261 (cf.]kun[de: p245)]'icima[na:]ja 「糸満人(漁
民)は」 p246 [[ku:]ja 「今日は」 pp236-8, 240-1, 259]ma:[ga]ja 「孫は」 p254]pi[t'u]ja:
「いるかは」 p249]p'u[ne:] 「船は」 p246]p'uQ[p'u:]ja 「おじいさまは」 p260]wara:[we:]
「子供は」 p254

(24) a 型. 'a[ri]ga 「あれの」 p238 [[da:ga 「どこに」 p243 iQ[t'a]garu 「おまえたちが(ぞ)」
p247 [[seNneNt'aga 「青年たちが」 p246 ta[rugaru: 「誰だ(ぞ)」 p251 'ut'a:garu 「歌
か(ぞ)」 p241

b 型. (])wa:[ga 「私が」 p252]wazja:[ga]ru 「仕事(ぞ)」 p252]nuN[ga] 「何で」 p255

c 型.]'icima[na:]ga 「糸満人(漁民)が」 p246]k'eQ[sa]ga 「どれだけ」 p257]k'eQ[sa]ga]ja:
「どれだけずつ」 p257]kami[zja:]ga 「亀さんの」 pp236-7

(25) a 型. du[sin(u) 「友達の」 p241 [[ju:]nu 「言う(連体形)」 p239 ju[mi]nu 「嫁の」 p238
kw'a:nu 「子供が」 p244(転写漏れ) mu[ra:nu 「村の」 p248 naNmanu 「今の」
p254]ju:[zju]nu[ga 「用事が」 p255

b 型.]'akine:munu[nu 「高い物の」 p259]siQt'a[nu 「数久田の」 p246]tusui[nu 「年寄
りが」 p254]waza:[nu 「仕事(ぞ)」 p252

c 型.]ma:[ga]nu 「孫の」 p254]'uNna[ge:]nu 「長い間の」 p238]'uNnazja[k'i]nu 「恩
納崎の」 p244]jak'usi[k'u]nu: 「約束の」 p259

(26) a. 格助詞 ni 「に」

]e:[zju:]ni 「友達(c)に」 p239]p'ira:[gi]ni 「ざる(c)に」 p248 mu[ra:ni 「村(a)に」
p249]ne:su:[ni 「内緒(b)に」 p249]p'uro:[ni 「畠(b)に」 p243 'u[mani 「ここ(a)に」 p254
[[p'a:]p'u:zi[ni 「先祖(複合-b)に」 p245]wazja:[ni 「仕事(b)に」 p252

b. 格助詞 zi 「に(行って)」

[[da:zi]ge: 「どこ(a)にか」 p255]ja:[zi 「家(b)に」 p254]p'uro:[zi 「畠(b)に」 pp243-4

c. 格助詞 ci 「で」 + 取り立て助詞 ru

]ga:[ci]ru 「がんばり(b)でこそ」

d. 格助詞 Nt'i 「で」

[[jaN]t'i (コンサルタント jaN[t'i) 「家(b)で」

e. 格助詞 ra 「から」

]a[t'o:]ra 「後(c)から」 p239]siQt'a[ra 「数久田(b)から」 p246 'u[rira: 「それ(a)から」
p247

f. 格助詞 k'aN 「より」(+取り立て助詞 ja)

]wanu[k'aN,]wanu[k'aN]ja 「私(b)より(は)」 p256

g. 格助詞 madi 「まで」

]hjak'u[sa:]madiN 「百歳(c)までも」 p262 [nama]di[na: 「今(a)まで」 p259 niQ[k'amad(i)
「遅く(a)まで」 p259

h. 取り立て助詞 Nde: 「なんか」

]cj'a[Nde]: 「茶(b)など」 p252 na[cimakiNde: 「夏負け(a)など」 p252 u[riNde: 「それ(a)な
ど」 p254

i. 取り立て助詞 cj'uN 「さえも」

[cj'ui]cj'uN 「一人(c)さえ」 p241

j. 取り立て助詞 ru 「こそ」

]aN[ci]ru 「そのように(c)こそ」 p253 naNmaru 「今(a)こそ」 pp253,259 N[t'a:]ru 「ム
タ(人名)(a)こそ」 p251]t'i[ci]ru 「一つ(c)」 p256]wazi[k'a]ru 「わずか(b)」 p248 [[taNk'a:ru
「向かい(a)」 p244

また、ローレンス(2005: 83)が大宜味村田嘉里方言で観察しているように、名詞の複数接辞の中にも一部の助詞と同様にふるまうものがある。複数接辞のうち、cj'a: と t'a は助詞と似た接続が観察される。

(27) 複数接尾辞 cj'a:, t'a

]inaguN[cj'a]: 「女(b)たちは」 p248 uN[zjut'a 「あなた(a)方」 p249]wara:[wi]t'a 「子
供(c)たち」 p255 [[seNneNt'aga 「青年(a)たちが」 p246

t'a は、人称代名詞では i'Q[t'a 「おまえたち」、i[t'a: 「おまえたちの」、]waQ[t'a 「私たち」
のような拘束形式として現れる。一方、kw'a: 「子供(a)」の複数とみられる]kw'anu[kj'a:]
と]kw'a:[wi:] は、名詞のアクセント型を変えている。また、指小辞 gwa は]kw'a:[si] 「菓子(c)」
に接続する 1 例 (]kw'a:si:[gwa p254) であるが、これも助詞接続とは異なるふるまい
となっている。

名護方言の起点を表わす格助詞は、(26)e の ra 「から」のほか、k'ara 「から」があるが、

NHK 資料では、同じ語形が 2 回出るだけである。

(28) saNsiNpi[kj'a:]k'ara 「三味線弾き(c)から」 p242

語末音節のみが高いという特徴は C 系列のものであるが、「三味線(a)」と「弾き(α)」から予想される派生語は、周辺方言の記述では A 系列となるのが規則的であるので、この助詞自体がアクセント型(JL+)をもつことによる下降の可能性も検討しなければならない。しかし、コンサルタントの(共通語化した)発話に現れる格助詞「カラ」の分析では、]カラが現れるのは C 系列と推定される名詞の後に限られている。なお、コンサルタントの共通語形は、片仮名で転写する。

(29) a.]フ[ネ]カラ「船(c)から」]ナ[ハ]カラ「那覇から」]ア[ト]カラ「後(c)から」]ウム[サ
ー]カラ「宇茂佐から」]ハタ[ケ]カラ「畠(c)から」]イト[マン]カラ「糸満から」]アパ
ヌ[ク]カラ「アパヌク(城最古の聖所)から」

b. オキカ]ラ「沖(a?)から」コ[コカラ「ここ(a)から」ム[コーカラ「向こう(a)から」ヒ[ト
カラ「人から」コッチカ]ラ「こっちから」オ[キ]ノ]ホーカラ「沖(a?)の方(a)から」コ
インゾ[コ]ノ]アタリカラ「湖辺底(c)のあたり(a)から」 トーキョーカラ「東京から」

c.]スクータカ]ラ、]スッタカ]ラ「数久田(b)から」フ[カイ]トコロ[カ]ラ「深い(β)とこ
ろ(b)から」

共通語化した発話でも名護方言のアクセントの実現について大きな変更がない、と仮定すれば、格助詞 k'ara も(23)-(26)の助詞と同様に無契機であり先行の語のアクセント型に応じてピッチが決まるといえる。今のところ、名護方言の格助詞は一般に、基本的にすべて無契機である、と考えてよいかもしれない。ただし、共通語化した発話で現れる接続助詞のカラは、A 系列の動詞でも B 系列の動詞でもテ]カラの連続で現れる。また、名詞接続の助詞でも]トカのように、必ず低起で現れているものがある。

B 系列に接続する場合の(29)c は、B 系列名詞の文節末に H が現れる実現例を含んでいる。(8)b で述べたように、助詞の側に H が現れる B 系列名詞が、語アクセントとして名詞の直後に H を付与するのか、文節アクセントとして文節末に H をもつかを決定する上で、2 音節の助詞が重要であるが、NHK 資料にはない文節末の H が、コンサルタントの発話では数例出現している。ほかには、トコロマ[デ「ところ(b)まで」がある。A 系列と並行的に、文節末に下降調(F)が加わることによる揺れという解釈も可能である。もう一つは、B 系列名詞文節が先行する場合の連文節音調に結びつける解釈である。ただし、(29)a の「数久田から」は連文節とは解釈できない環境での出現例である。

3.3. 連文節のアクセント形

NHK 資料の談話には、今帰仁方言先行研究の(11)~(14)に対応するものを含む、以下のような連文節構造が現れている。

(30) a. [j'a: hataN]wa: ha[taN su]gu 「お前(a)の方(a)も私(b)の方(a)もすぐ(c)」 p238

b.]wa: (])'e:[zjuN] j'a:]'e:[zjuN]]so:t'i[ciyo]:

「私(b)の友達(c)もおまえ(a)の友達(c)も連れ(β)てき(β)てね」p238

c. 'a[ga]gusiku[ja]¹⁶

「私達(a)グスク(b)は」 p248

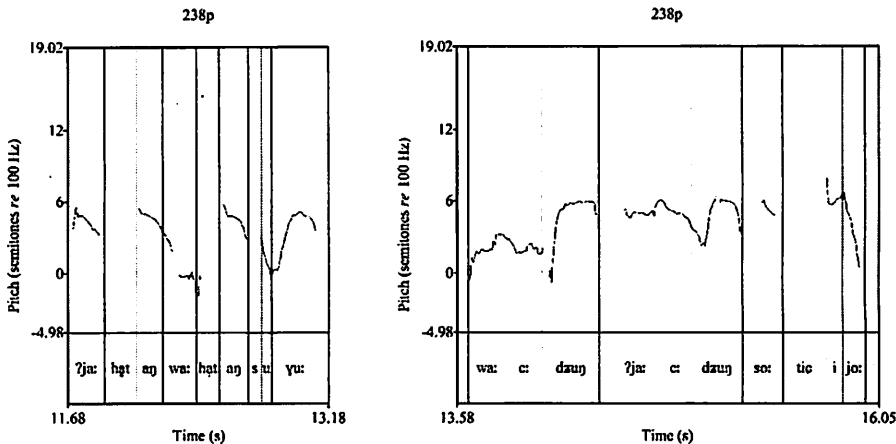


図5 (30)aと(30)b

まず、A系列の文節にA系列の文節が接続する場合(a+a)には、文節境界を超えた平進となり、後続文節内部の上昇はあらわれない。これに対し、後続文節が低起の系列となる a+b と a+c では、後続文節の冒頭で下降が聞き取れる。(30)b では、2回目の'e:(]L+)'は、1回目と比べて下降が浅いが、[H]にあたる zjuN のピッチは2回でほぼ同等の高さとなる。(30)c でも、]L+部分 (gusiku)の下降は先行A型冒頭の'aと同程度であり、[wa]と実現する助詞で下降前のピッチが回復し、この後に続く終助詞 ja の上昇下降調に向けてそのままピッチが上昇を続ける。これに対して、B系列の]wa:に接続する場合は、後続文節が低起の場合でも冒頭の低いピッチを保ったまま平進し、連文節の末音節だけが卓立する音形となる。

NHK 資料の中で、a+aの連文節の平進が聞かれる例は、以下のようなものがある。

(31) a. [[saNsiN picɪ, [[seNsiN pi]ci: 「三味線(a)を弾い(α)て」 p240 [[seNsiN pik'a:[si 「三味

線(a)を弾かせ(α)て」 p241

b. 'u[ri sinda]:(p240) 「それ(a)をしよう(α)」 'u[ri sik'o:tuk'iNse:]wiruwa 「それ(a)を準備し

(α)ておい(α)てください」 p244 'u[ri sik'o:tuk'ut'ujɔ]: 「それ(a)を準備し(α)ておく(α)から

¹⁶ ja は[wa]で実現している。

よ」(p244) 'u[riNde: k'a:ri]uma:[raN 「それ(a)など食べ(a)ようと思わ(β)ない」 p254

「三味線」が A 系列の動詞「弾く」の目的語となる例は(31)a の 3 例があるが、いずれも動詞との間は平板である。一方、(28)で挙げた複合語の「三味線弾き」は、同じく平進するが、全体として C 系列のピッチ形で出る。([samiseN pi[kj'a]: p239]seNsiN pi[kj'a]: p240-1)代名詞「それ」が目的語になる(31)b の 4 例でも、すべて連文節全体が平進となる。

(32) a. ha[ne:k'aci ka: 「にぎやかにし(a)て来(β)よう」 pp236-8

b. mu[ra:nu meN]gat'i 「村(a)の前(c)に」 p248

(32)a は、後続する終助詞 na: (男性話者)あるいは ja: (女性話者)を伴って 4 回の出現例があるが、a+β の連文節でいずれも平進している。後続文節が 1 音節であることが冒頭の]の消去に関係しているかもしれない。(32)c は、a+c の連文節であるが、低起ではない 1 音節の C 系列が後分となって平進化している。

このような a+(x)連文節の平進化には、「句」としての統合が条件となっているとみられる。(33)は、A 系列の 4 つの文節の連続であり、間にポーズがないが、それぞれの文節がすべて「句」となっているとみられ、どの文節間でも微妙な「音調の谷」があり、平進には聞こえない。

(33) [j'a:ja] [kw'a:nu] [[so:]] 'iQ[ci 「おまえ(a)は子供(a)が聡(a)が入っ(α)て」 p256

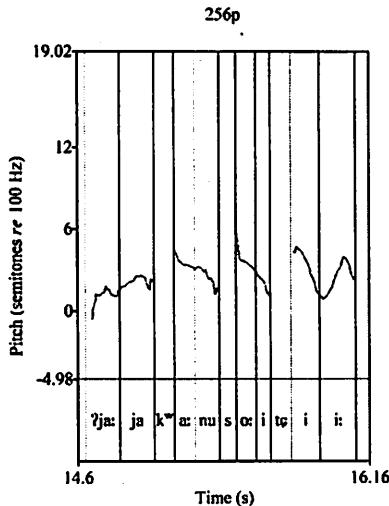


図 6 (33)

コンサルタントからも、a+a の連文節では同様な平進があることが確認できたが、文節間で下降のある発話も許容される。この場合でも、後続文節には上昇がなく、二句構造になっているという解釈はできない。

(34) [j'a:(j)yumi 「おまえ(a)の嫁(a)」 a[riga(j)yumi 「彼(a)の嫁(a)」 [j'a:(j)pana 「おまえ(a)

の鼻(a)」

コンサルタントの共通語化した発話でも、A系列の文節に次文節が平進接続する例は、a+aの連文節に限って観察される。ただし、後続文節がA系列であっても、B系列やC系列が接続する場合と同様の文節間下降が聞かれる例も多く、境界下降のみを基準としてB系列あるいはC系列と判断するのはむずかしい。

- (35) a. コ[ノヒトワ～コ[ノヒト]ワ 「この(a)人(a)は」 アノトージワ 「あの(a)当時(a)ゴ[ネンニイッカイグライ]ワ 「五年(a)に一回(a)は」 シャ[ミセンヒクヒトカラ 「三味線(a)弾く(α)人(a)から」 但し イマノ]ヒトワ 「今(a)の人(a)は」
 b. コ[ノ]チョーチョー]ワ 「この(a)町長(b)は」 コ[ノ]ナ[カニ「この(a)中(c)に」 イマノ]コトバ]ワ 「今(a)の言葉(b)は」 ナゴノ]コトバ[ノ「名護(a)の言葉(b)の」ドコノ]コド[モ]デス[カ「どこ(a)の子供(c)です(β)か」

前文節が低起で連文節がL+\$Hで実現する場合のうち、後続文節がA系列であるものは、NHK資料の中では以下のようなものがある。

- (36) a.]hwiNzjuk'unu si[cj'a: 「湖辺底(c?)の下(a)は」 p245
 b. ([[cj'a:)]p'uro: 'a[ga:ki 「(いつも)畑(b)に上がった(α)て」 p256
 c.]waQt'a du[si 「私(b)たちの友達(a)」 p240

(36)aの地名「湖辺底」は、コンサルタントの発話ではコヘンゾ[コ]とc型であるが、NHK資料での語形はこの1例しかなく、型の判断ができない。(36)cは、複数接辞t'aへの上昇が現れない実現形である。コンサルタントの発話では、]waQ[t'a]dusiという音形で出た。

これらの例を除くと、ほぼb+bの連文節構造で前の文節末の上昇と次文節頭の下降が共に消えて低平な連続となっていると解釈できる例である。

- (37) a. (]'iQ[kw'a)]guhja:kuna: muQ[ci 「(一貫)500(b)ずつ持つ(β)て」 p237
 b.]tusuinu sat'a:]ja 「年寄り(b)の沙汰(b)は」 p260
 c.]ina:gunu ga:[ci]ru 「女(b)のがんばり(b)でこそ」 p249

後述するように、複合語形成においては前分がB系列であるかC系列であるかに関わらず上昇を失う場合があるが、連文節構造の場合は前文節がB系列の場合にのみに平進化が起きるとすれば、単独形で現れるB系列語末のRが、接続形においては次文節の上昇として実現しているとまとめられるかもしれない。(38)は、「目(b)を閉じる(α)」が「亡くなる」の忌み言葉として用いられている例であるが、(38)aでは連文節全体が低平となっている。これは、先行する副詞と句を構成しており句頭の文節でないためではないかと考えられる音形である。(38)bでは、同様の句構成であるが、動詞に接頭辞he:が加わっており、複合

動詞としての上昇契機がこの接辞のあとに現れているものと分析できる。

(38) a.]'aN[ci]mi:k'uiNse:]ci 「そんなに(c?)目(b)を閉じ(α)て」 p260

b. kju:[ni]mi:he:[k'u:t'I 「急に(a)目(b)を掻き閉じ(α)て」 p260

コンサルタントによれば、(34)に対応する低起の形は、一音節卓立型の音形になる。ただし、連濁を起こしており、複合語構成と考える可能性もある。

(39)]wa:yu[mi 「私(b)の嫁(a)」]wa:ba[na 「私(b)の鼻(a)」 cf. [ʔwa:]nu hana 「豚(c)の鼻(a)」]mi:nu[me: 「目(b)の前(c)」

共通語化した談話では、複合語の可能性のある重複形 (]ヒトリヒト[リ]、コータイコー[タイ]) を除けば、低平接続の連文節構造は観察できなかった。

3.4. 語内部の下降

(15)で仮定した名護方言のアクセント型では、下降契機]が現れるのは、B系列とC系列の語頭と、C系列の語末だけである。従って、予想としては語の内部に下降が現れることはないはずであるが、NHK資料の中には語中に下降が現れる語形がかなりある。これらを分析する。

3.4.1. 語複合境界の下降と上昇

(27)で述べたように、一部の接尾辞は助詞と同様に、先行部のアクセント型を変えないため、C系列の文節内部で語末に下降が現れるのと同様、C系列の名詞にこれらの接辞が付加された場合は、接辞の前で下降が起きることになる。

しかし、形態素境界の下降としてもっとも多いのは、語複合の場合の境界でのピッチ変化である。複合語構成は、山原諸方言の先行研究をみる限りかなり複雑な仕組みがあることが予想され、確かなことがいえる段階ではないのであるが、後分が低起の系列であることによりその冒頭の下降契機が複合語においても保存されているとみなせそうな例が、かなりある。典型的には、前分が(無契機の)A系列である場合である。

a+b, a+cのタイプの複合語の中には、下降契機を挟まず両成分が平進する場合と、後分に先行して下降が出る場合がある。

(40) mura:zju]ri 「村(a)集会(b)」 p258 [[k'e:munu 「食べ(α)物(b)」 p252

(41) nu[k'i]munu[N 「手土産、募り集めた(α)もの(b)¹⁷」 s(a)[ki]do:[gu 「鋸、先(a)道具(c)」 p244 ka[makici]ja:nu 「蒲吉(a)家(b)の」 p251 cj'uN]bire: 「人(a)づきあい(b)」 nu[si]k'at'i 「近づく、向かってくる、のしかかっ (α)て+あっ(β)て」 p246

¹⁷ 今帰仁 nu[cuN] 集める。募る。金や物品を募り集める。

ただし、(41)の各語でコンサルタントから確認がとれたのは、jja:「家」に終わる複合語のみである。名護地方でも名字のほかには屋号があるが、この屋号の接尾辞jja:は、A系列またはC系列の地名とみられる語に接続する場合はjja:という形をとる。「人づきあい」は、チュービレーという無下降の形で出る。「銚」は、]ピトウドー[グ]「いるか(c)道具(c)」である。動詞「近づく」は名護湾にイルカの群れが押し寄せる描写に使われている動詞であり、今婦仁方言 nu[siik'a]N「けんかなどのとき、立ち向いのしかかる。姿勢をかまえて挑み向う。」と近縁とみられ、動詞「ある(β)」と同じ活用形を取り、この動詞を後分にもつ複合語のような音形で出ているが、コンサルタントは知らない語であった。

一方、コンサルタントの発話の中にも、ナ[ゴコト]バ「名護(a)ことば(b)」のように境界下降のないものと[グン]ピトウ「ごんどう(?)鯨(c)」や[ナン]グスク「名護(a)城(b)」のように、後分の低起性が保存されているとみられる形の両方が出る。

語頭1音節が高い場合には、前分が必ずしもA系列とは断定できない場合が多い。

(42) [[naN]dukiga 「何(?)時(b)が」 p239 [[p'a:]p'u:zi[ni 「祖先,祖母(?)・祖父(b)」 p245

(43) [[ku:]t'e:mija 「少しは」 p253 cf. [[ku:]t'e:mi(ru) 「少し(a)」 pp252,262 ['u:][dui] 「大漁、大(?)取り(β)」 p245

(42)は後分が低起とみられる語例であるが、(43)の「少し」は副詞接辞が後分であり、非下降形も出ており、また、「大取り」はNHK資料では重起伏的な音形なのに対してコンサルタントは]オード[リ]と発音しており、共に語頭隆起の可能性がある。a+aの複合語は全体として非下降のA系列の語になると予想されるが、NHK資料の(44)の語例は、いずれも単純に「平進」とは言い難い微妙なピッチ下降が2拍目の後ろに聞かれ、コンサルタントの平進的な発音とやや異なっている。

(44) [[mi:jumiN 「新(a)嫁(a)も」p240 ka[wa'ukiziN]ma 「川(a)浮き(α)伝馬(a)」 p247 na[cimaki, na[cimakiNde: 「夏(a)負け(α)など」 pp251-2

このような、2拍目の高音調は、'a[ga(j):()riN「東江(a)も」(p248)のような複合語でないA系列の語でも観察され、(41)の例も合わせ、NHK資料ではA系列の語を中心に語頭のピッチ上昇が(異音的に)現れている可能性がある。

低起の複合語では、形態素境界の前あるいは直後にピッチの上昇があるものと、語末側でピッチ上昇があるものがある。形態素境界の前にHが現れる場合は、境界で下降する。後分が2音節以上で境界の直後にHがある場合も、語の内部で下降が現れることになる。(47)のように、後分が1音節の場合は、全体としてはC系列の1語と同じ音形になる。Hが複合語末に現れる場合は、複合語全体としてB系列の1語とみられる場合とC系列の1

語とみられる場合の両方がある。

(45)]na[ga:]jami 「長(β)病(β)」 p260

(46)]ju:'aki[du:]si 「夜(b)明け通し(b)」 p238]p'o:[ziN]ma 「大伝馬(a)」 p247

(47)]du:si:[me:] 「混ぜご飯、雑炊米」 pp239,241-2]waka:ri[meN 「別れ(b)米」 p240]'aci[zjaN
「熱い(β)茶(b)も」 p260]'asa:[ni: 「朝(?)寝(a)」 p253]'asa:[zja: 「朝(?)茶(b)」

(48)]nu:[hwiN] 「何(b?)でもかん(?)でも¹⁸」 pp252,254]mahamunu: 「うまい(β)もの(b)」
p252]ma:k'uma:[k'u:]t'(u) 「うま(β)く(β)うま(β)く(c)」 p239]'akine:munu[nu 「商(β)い(β)もの(b)の」
コンサルタントの発話でも、数は少ないが]ムカ[シ]バナシ 「昔(c)話(b)」]ホジョ[タン]
クデ 「補助タンクで」]コーソク[ドー]ロ 「高速道路」のように、語の内部で下降がある低
起の複合語がある。低起の複合語では]ジャーカーピ[トウ] 「バンドウ(?)イルカ(c)」のよう
に、語末音節のみに H がある語が多数であるが、共通語化した発音では語末母音が伸びな
いため、この複合語形が B 系列なのか C 系列なのかは単独語形だけでは判断できない。「バ
ンドウイルカ」の場合は、助詞接続形が]ジャーカーピトウ[ガ]であるので、C 系列のピ[ト
ウ] 「イルカ」とは異なり B 系列ということになる。]グスクバ[シ 「城(b)橋(a)」は、]グス
クバ[シ]ノで、C 系列である。

3.4.2. 語複合境界以外での下降

NHK 資料の 2 音節語の中には、高・低のピッチで現れるものがある。このうち、「元気」と「心配(心痛)」の 2 語は、低・高との間で揺れる。

(49) a. [[geNk'i]'ataN[se: 「元気(a)でし(β)たか」 p251

b. [[geNk'i] hicj'a]ki[]jo: 「元気(a)にし(α)ていなさい」 p253

c.]cj'a:[geN]ki]'at'aN[se: 「ずっと(b)元気(a)でし(β)たか」 p256

d.]geN]k'i...]cj'a:]pasi[t'u] 「元気(a)..いつも(b), しっかりと(b)」 p256

(50) a. siN[pai su]Ndo:[ja: 「心痛(a)し(α)ているよ」 p260

b.]siN]p'ai si[miso:]raNgu[t'u] 「心痛(a)なさら(α)ないように」 p261

(51)]cjo:[mi:[huN]gu[t'u] 「長命(a)する(α)ように」 p262

「長命」もコンサルタントの発話では、]cjo:[misiNso:]ri]jo:[ja: 「長命してください」では、
a+a の平板な連文節構造で出る。コンサルタントの共通語化した発話でも、同様の下降・
非下降の揺れは頻出し、下降のない音形は、すべて A 系列と解釈できる音形である。

(52) ホー]ゲン~ホー]ゲン]ガ~ホー]ゲンデ 「方言で」 セン]トーナツ[テ~セントー]ナツ

¹⁸ 今婦仁 nuu[hu]i。コンサルタントはヌン[クイ]。

テ「先頭になっ(b)て)」 テン]マ～テンマガ「伝馬(船) ム]コー～ム[コーカラ「向こう」ホン]シェン～ホンシェンカ]ラ「本船から」 ゼン]ブ～ゼンブ「全部」 ケー]ゴ～ケーゴ「敬語」

UCLA 資料(3)II の A 系列 3 語の高・低での実現も、これと同種のものである可能性がある。(52)は大半が第 1 音節が長いが、(3)II も、音声的には、第 1 音節の上昇が聞き取れる程度の長さをもった発話である。

この下降の解釈としては二通りの可能性がある。一つは、語頭隆起としての解釈、もう一つは、文節末下降としての解釈である。助詞接続の場合は下降があっても助詞側に現れていることは、文節末下降を支持するとみられるが、ソノトー]ジワ「その当時は」テー]プニ「テープに」のように、助詞を伴う場合にも下降が現れている例がある。

コンサルタントの共通語化した発話では、2 音節語以外でも、語末音節が(任意に)下降する例が散見する。

(53) コノアタ]リデ「このあたりで」]シュリコ[ト]バト「首里言葉と」スナハ]マ～スナハマ「砂浜」ワザワ]ザ～ワザワザ「わざわざ」オーガネ]ク～ポーガネク「大兼久」]オーミ[ナ]ミ「大南」]グランドゴ[ル]フ～]グランドゴル[フ]「グランドゴルフ」

(53)の例からは、長い語ほど語末音節が低くなる可能性が高まる傾向がうかがわれるが、条件については未詳である。

4. まとめ

以上、名護方言の二つの音声資料の分析を通して、この方言のアクセントについていくつかの仮説を立て、修正する作業を行った。この仮説は主として名詞を中心とする単純語のピッチ形に関するものであり、複合語については出現例を示すにとどまっている。また、動詞や形容詞については、主として語頭の下降契機の有無に基づいて、下降契機のない A 系列と下降契機をもつ B 系列に分類する作業を行っただけであり、個々の活用形や、補助動詞形を含む複合的な音形については言及しなかった。1 音節の活用形については、下降契機の出現についてさらに詳細な分析が必要である。

特に、談話資料である NHK 資料とコンサルタントの談話の分析から浮かび上がるのは、一つは、このアクセント体系において B 系列と C 系列の語頭の下降契機が(一部の連文節構造を除き)一貫して現れなければならない重要な弁別特徴である、という点であり、もう一点は、その他の下降契機の位置がしばしば可変的である、ということである。後者は、語長のような音韻条件が関与しているとすれば、イントネーションのような有意味な条件だけでなく、自由変異的な、音韻論的な揺れが含まれるといえる可能性がある。たとえば、

語頭の下降契機に先行する位置では、連文節構造の先行する文節の末音節が低く現れやすい、というような仮説も立てられそうである。このような下降は、位置の固定した「アクセント」とは見なしがたい。一音節卓立型のH音節をもつC系列における上昇契機もまた、位置が固定していないことになる。

4.1. 可変長コントゥアによる位置の可動性の説明

このような、位置の可動性を、「可変長コントゥア」と解釈して積極的に取り込んで、(15)の仮説を修正したものを提示する。A系列とB系列は「文節」を単位とし、\$を「音節境界」、#を、文節の中の「自立語末」、%を「句頭」とする「位置」の表示に組み合わせて、<R> (可変長上昇)、<F> (可変長下降)、<RF>(可変長上昇下降)をこれらとの位置関係に応じて配置する。

(54) A系列 (%<R>)H+(<F>)

a. A系列句頭%<R>

B-C系列の低起(j)に相当する語頭上昇であるが、名護方言では(単独形を含む)句頭形として現れる。2拍が下限であり、2拍語までは後続の<F>が音節内で実現して下降することはない。しかし、それ以上の2音節語や、2拍2音節語に助詞を伴う文節では、文節末音節に<F>が実現して低くなることもある。(直後に<F>が後続しない場合のR]は、自由変異的な「語頭隆起」と解釈できる可能性がある。)

b. H+

非下降部。長さの上限は観察されない。

c. A系列文節末下降(<F>)

句末と、連文節構造で、後続の]がない場合(a+a; a+1音節C系列)には現れない場合が多い。もっとも短い実現形は連文節構造(34)の]。典型的には文節末1音節の]L。文節末に2音節以上の下降が現れる場合の条件は未詳。

(55) B系列]L+#<RF>

a.]L+#

語末音節冒頭まで継続する低平調

b. 助詞部<RF>

文節末の助詞の長さに応じた可変長コントゥア。

- ・助詞がない場合は、R#]
- ・助詞が1音節であれば、#[H]
- ・助詞(連続)が2音節であれば、#HSL~#LSH]

- ・連文節構造で現れない場合には、後続文節頭音節まで L+が延長する。

(56) C 系列 1 音節語 H(#) 2 音節以上]L+\$H\$<F>#

a. (]L+)\$H\$

1 音節の高平調卓立。先行部があれば冒頭に下降契機をもつ低平調

b. \$<F>#

語の長さに応じた可変長コントゥア。

- ・通常は語末下降契機#
- ・ある程度の長さ(4 音節以上?)で 1 音節の交替形 L としても実現

A 系列が文節全体でピッチ形が決まるのに対して、低起の B 系列と C 系列では、前者が助詞側、後者が自立語末の前にそれぞれ可変長コントゥアをもつというように、自立語語末位置を基準としてピッチ形が決まっている点が、この方言の特徴と言える。この語末境界を超えるような「揺れ」があるとすれば、(8)e で問題にした、B 系列と C 系列の弁別の喪失につながるはずであるが、NHK 資料でもコンサルタントの発話でも、少なくとも 3 音節以内の語では卓立音節の位置は固定しており、資料の範囲では揺れない。但し、4 音節以上の語では、単独形で短い語末母音に H が現れている場合に B 系列と C 系列の対立が中和しているのは上述の通りである。

B 系列と C 系列の対立がどこまで維持されているかについては、山原方言の比較のためにも語彙リストによる調査によってデータを充実させる必要があるのは言うまでもない。両音声資料と松森(2009)の金武方言 B 系列・C 系列の対応は以下のとおりである。また、コンサルタントの共通語化系をカッコ内で示した。具体的な音形については、資料として論文の最後に添付した。

(57) a. B 系列で一致

手、荷、目、網、米、島、山、豆、笠、麦、夜、亀(人名)、男、女、家、畑
(キ「木」、ナミ「波」)

a'. B 系列で松森(2009)B,C グスク(今帰仁と一致)(サバニイ(割り舟))

b. C 系列で一致

浜、船、中、硯、年上、子供 2、孫、母、餅、籠、ざる、今年、一つ
(ホネ「骨」、ウミ「海」、マツ「松」、コエ「声」、ムカシ「昔」、ハタケ「畑」、?wa:
「豚」)

「今日」(今帰仁とのみ一致)

- b'. C 系列で松森(2009)B,C いるか (今帰仁と一致)
- c. 不一致 (アブ[ラ]「油(c)」コト[バ]「言葉(b)」)
- d. 不明 pisi「干瀬」(一例の単独形のみ。pi が無声化する。松森 2012 B 系列)

4.2. 山原祖語からの変化

ローレンス(2009)の「北琉球祖語」は、長母音化を曲調など声調変化に伴う音声的な変化の残存とみる再建形であるが、B 系列と C 系列を語末部の H の拍数の違いとした上で、語末拍のみが高い C 系列をもつ方言を、音節内の曲調を避ける変化によって説明する。

(58) A 系列 *H\$HH(\$L) B 系列 *(L\$)L\$LH C 系列 *(L\$)LH\$H

ただし、この再建では山原方言に多い C 系列の 2 拍 2 音節語(H\$L~L\$H)をうまく説明できない。山原祖語としては、小川(2012)が提案する、B 系列は語末拍、C 系列は次末拍に H のある再建形のように、C 系列の語末が低いもののほうがよい。この再建形では、伊是名方言や今帰仁方言・大宜味村津波方言の 3 拍以上で B 系列と C 系列が中和する変化を仮定する。

(59) A 系列 H+ B 系列 L+H C 系列 L+HL

松森(2009: 120)は、北琉球方言のアクセント体系が「昇り核」アクセント体系として解釈できる可能性に言及する。また、小川(2012)は、今帰仁方言を「昇り核」をもつ体系として分析している。(59)が「昇り核」による位置アクセントの体系であるならば、名護方言のような語末音節のみが高い C 系列への変化は、位置アクセントの移動(.H#>.LH#, .H.L#>.H#)として説明できることになる。

しかし、日本語で起きたアクセント変化の中には、語末の高が次末へ移動すると考えたほうがよさそうな変化もある。屋名池誠(2004)の記述する平安時代京都方言の動詞活用では、低起式の動詞は連体形で L+H なのに対し、4 拍以上の他の活用形では、L+HL の音形となる。高起式では連体形 H+に対し、2 拍以上の他の活用形で H+L となることを考慮すると、平安時代京都方言の連体形以外の動詞活用形は、語末に可変長下降コントウアをもち、H/LL の語頭側の「式」が維持できる場合にはこれが末音節の L として実現する、という解釈も可能であろう。

山原方言の多くにおいて、語長がピッチ実現の型に関与することと、語頭の「式」の弁別が語長に応じて維持されていることは、この平安時代京都方言の動詞活用とよく似ている。2 種類の「低起」が 2 拍以上で維持されている名護方言や金武方言では、C 系列で、3 拍名詞まで C 系列語末/文節末の L が出ないのに対し、大宜味村津波方言では、次末音節が短かければ低起は 2 拍名詞で H が語末 1 拍(B 系列)、3 拍以上で H が語末 2 拍(B 系列/C

系列)、次末音節が長ければ低起は3拍以上でHが語末1拍(B系列/C系列)となり、低起は1系列のみに減っている。

この可変調コントウアが、語頭/語末/文節末といった境界の近傍にのみ現れることは、屋久島諸方言や種子島方言など、南九州の方言とも共通の特徴である。語頭の式と合わせ、音節連続の統合を境界部のピッチコントウアで表示する体系としての「語声調」類型¹⁹にもよくあてはまっている。

通時的解釈が問題となるもう一点は、B系列とC系列の「語声調」の単位が、文節ではなく語である、ということである。第27回日本音声学学会大会の公開シンポジウムで、上野善道氏はN型アクセントのもっとも重要な性質として「文節性」を挙げたが、名護方言を含む山原諸方言は、「N型アクセントではない語声調」ということになろう。これらの系列が文節性を失ったとみるか、獲得しなかったとみるかは、琉球方言アクセント史の全貌が明らかになるまでは結論を控えるべきであろう。

しかし、もしも「文節性の獲得」が真性「N型アクセント」へのイノベーションであるとすれば、琉球方言だけでなく、日本語のアクセント史を考える上で重要な含意をもつのではないかと考える。(音節連続の韻律特徴としての)「アクセント」が実現する単位が、「語」から「文節」になる、というのは、アクセント単位の拡大を意味する。この点で、複合語アクセント規則とも似ており、真正N型アクセントである鹿児島方言では、両者(及び一部の連文節構造)に先行成分の型が全体に実現するという同一のプロセスが用いられる。これに対して、名護方言では、複合語においても成分の境界に語頭の下降契機が出現するなど、複合語全体が1アクセント単位に統合しているとは見なし難い構造も多い。つまり、アクセントの実現単位が短いままである場合がある、ということになる。

位置によるアクセントの対立をもつ体系では、語長が伸びるほど型が増える多型アクセントが可能である。これに対して、上昇や下降を含むようなコントウアによる対立は、単音節で可能な弁別が、音節数が増えるに従って維持しにくくなる。多音節の「語声調体系」では、境界部の局所的なコントウアの対立に依存することになり、語長が伸びるとむしろ型の区別が減る場合もあるのではないかと考えられる。逆に、複合語アクセントや文節アクセントのような単位拡大プロセスを全く持たないような「語声調」は、比較的短い音節連続のコントウア対立として、質的にも「音節声調」と似た、「(音節数の上限をもつ)多

¹⁹ 日本音声学学会第327回研究例会シンポジウム「語声調の音声的実現における異音的変異としての声調変位」(2013年6月22日国立国語研究所)で提案した。

音節声調」となるのではないかと考えられる。

名護の語声調体系の場合、すでに境界部の局所的なコントゥアによる対立となっており、長い語形を許し、何らかのアクセント単位拡大プロセスがあってよいはずであるが、にもかかわらず単純語とは異なるピッチ形をもつような複合語形成については、「多音節声調」とその声調サンディーの痕跡を残している可能性を考慮して分析することも検討すべきではなかろうか。

名護方言で「式」が維持されているように見えることは、日本語祖語との通時的な関係はどうなっているのかについて、大いに想像をかきたてる事実である。そのために、このまとめの後半部は、データに基づかない推測が先行している部分もある。実のところ、現段階では、たとえばB系列とC系列が3音節以下で対立しているとする根拠も、(57)で挙げたわずかなデータに依存している状態である。名護方言を山原諸方言の中に正しく位置づけるためには、先行諸方言と同程度以上の言語データの集積が必要である。

一方で、「式体系」がその機能上果たしていたはずの、文節境界や語境界の表示（あるいは非表示）に関して、比較すべきデータが欠けていることも指摘したい点のひとつである。琉球方言では地点数が絶対的に不足しているとみられる『全国方言資料』を補うような形で、琉球諸語の談話データの集積を急ぐ必要があると考える。

謝辞

「UCLA 資料の音声の名護方言のものに聞こえるか」という唐突な質問に、年末のお忙しい時期にご回答いただいた上、現地での調査をお勧めくださった狩俣繁久琉球大学法文学部教授、城公民館での調査の手配をいただいた名護市教育委員会文化課市史編さん係大嶺真人氏、かつての名護湾でのイルカ漁りの記録映画上映会当日でお忙しい中コンサルタントをご紹介いただいた宮里城公民館長のお力添えなくしてはできなかった研究です。また、日ごろから「語声調」に関する視野を広げていただいております千田俊太郎氏には、京都ご転出後も琉球方言資料に関して助言以上のご支援をいただきました。

NHK 資料から判断される名詞系列と語形例

<名詞・代名詞 a 型>

'a[ga「われわれの」 'a[ga:miN「われわれ」 'a[ga:riN「東も」 a[ri[ga「あれの」 a[si:bi:「遊び」
ci[mui「つもり」 [[da:ga「どこ」 [[de:ja「代金は」 du[si「友達」 'iQ[t'a「おまえたち」 [j'a]:
「おまえ」 [j'u:「魚」 ju[mi[nu「嫁の(N)」 ka[makici]ja:nu「蒲吉の家の」 ka[ra:da「体」 [[k'e:munu
「食べ物」 k'u[ni「村(国)」 kw'a:「子供」 kw'anu[kj'aN「子供たちも」 maNna「みんな」 [[mi:jumiN
「新嫁も」 mu[ra:]ja「村は」 mura:zju:ri「村集まり」 na[ci]ma[ki「夏負け」 [[na:ja「あなたは」
na[ma:「今」 niQ[k'amad(i)「遅くまで」 niQ[t'a「あなたがたは」 'N[ma]「そこ」 nu[k'i]munu[N
「手土産も、<募り集める」 [[po:nuk'uja「大兼久は」 s(a)[ki「先」 samiseN「三味線」 [[seNneNt'aga
「青年たちが」 [[siNpai「心痛」 [so:「聡」 [[taNk'a:ru「真向いぞ」 [[t'juN]bire:「人づきあい」
'u[ciNga]t'i「家に」 [[uNzjut'a「あなたがたに」 u[re:「それは」 'u[ta:「歌」

<名詞・代名詞 b 型>

]akine:munu[nu「商い物の」]cj'a[N:「茶」 [[ga:「がんばり」]gusiku]ja「城は」]hit'u[:「みやげ」
]humi[:「米」]ikega]ja:「男は」]ina:gunu「女の」]inaguN[cj'a]:「女たち」]ja:zi「家に行つて」
]ju:「夜」]kaNge:「考え」]munu[:「もの」]ne:su:[ni「内緒に」]puro[:「畑」 ()]sat'a:]ja
「沙汰は」]siQt'a[nu「数久田の」 su[[k'oN「焼香も(コンサルタント:]su:ko[:「法事」)]tusi[N
「年も」]tusui]ja「年寄り」]wa:「私の」]waka:ri]ri「別れと」]waQ[t'a「私たち」]waza:[nu
「仕事の」

<名詞・代名詞 c 型>

]a[ba]:「おばあさん」]aci[zjaN「熱い茶も」]asa:[ni:「朝寝」]asa:[zja:「朝茶」]aN[ma「おかあさん」]
]ap'anuk'u[hw'a:]ri「アバヌク(聖所のある地名)の方へ」]aQ[t'o:]ra「後から」]ba:[ki]
「籠の一種」]cj'aQ[cj'a]:「おじさん」]do:[guN「道具も」]du:si:[me:「雑炊米」]e:[zju:「友達」
]gusu:[gi「ご祝儀」]huN[du]ja「今度は」]'icima[na:「糸満衆」]jak'usi[k'u]nu:「約束の」
]ju:[zju]nu[ga「用事が」 [[ku:「今日」]kw'a:si:[gwa「菓子など」]kw'a:[wi:「子供(たち)」
]ma:[ga]ja「孫は」]mahamu[nu:「うまいもの」]maNsa[k'u]「満作」]me:[cj'aN「下着」
[[meN]gat'i「前に」]mi:[me:「見舞い(N)」]pa[ma]:'i[zi「浜に出て」 pi[kj'a]:「弾き手」]p'ira:[gi
「ざるの一種」]pi[t'u「いるか」]po:[cjaN「包丁も」]p'u[ne:「船は」]p'uQ[p'u:]ja「祖父は」]si[zja:
「年上」]so:[daN「相談」]u[gwaN[「拝み」]uNnazja[k'i]nu「恩納崎の」]wara:[we:]jo:「子供はよ」
]wara:[wi]t'a「子供たち」]wazi[k'a]ru「わずかぞ」

<動詞 a 型>

'a[ga:ki「上がる」 'a[gi:N]do[:「上げるぞ」 'asudi「遊んで」 'a[wa:t'aru:]waru「慌てるべき」

cirit'i 「連れて」 [[da:cige:ra 「濡らしてから」 ha[ne:k'aci 「にぎやかす (N) hi[t'e:]sa 「取った」 [[ho:iN]so:ruwa; 「お買いください」 'i[kaNkin(e) 「行かなければ」 'iQci 「入って」 'irit'i 「入れて」 ja]:[se: 「やれ」 j'u: 「言う」 ju[di 「呼んで」 k'a:ri 「食べようと」 k'uiruwa 「暮れば」 k'u:t'i 「閉じて(なくなつて)」 [[ma:raNk'ui 「回らずに」 [[mo:ti 「舞って」 nu[ru:waru 「乗れば」 nu[sit'i 「乗せて」 pa[ge: 「配れ」 pic'i 「弾いて」 sa:wi:sa 「します」 sik'o:t'i 「準備して」 [[si:iN]so:re: 「添えて、おまけしてください」 'u[k'urit'i 「遅れた」 'usa:gi:[sa]] 「あげるさ」 [[u:t'a:t'uwa]N 「疲れている」 wa[kacet'u 「沸かしたから」

<動詞 b 型>

]acimi[t'i 「集める」]ain[do: 「あるぞ」]'aja:k'a[t'i 「あやかつて」]aN[se: 「であれ」]at'a:ira[ja]: 「当たらうか」]cj'a:r(u)[waN 「来た」]hami:i[ru 「頭に載せる、どうぞ」 he]:taru[ma]siNso:]:[re: 「ちょっと頼ませてください」]'i:sik'i[raN]k'ine: 「言いつけなければ」]'iziru[waru 「出れば」]ke:[t'i 「帰って」]maci[kaN]di 「待ちかねるな」]maN[di 「多い」]mi[ci 「見て」]mo:[i]N 「行きますか」]mo:k'i[t'i 「もうけて」 (])muQ[ci 「持って」]nu[di 「飲んで」]pak'ai[sa 「量る」]simu 「済む」]so:t'i 「連れて」]suNk'a:se: 「曳かせなさい」]suri[t'i] 「集まって」]taruma:[ri]ru: 「頼まれる」]tat'it'aN[di]: 「立ててあると」]t'ide:[t'izi 「おごつて行って」]tuiNga 「取りに」]tu[zi] 「研いで」]uk'usa[wi:]sa 「興しなさい」]'uma:[raN 「思わない」]waka:[raN]t'u 「わからないので」]waki:[ni]ja: 「分けるには」

<形容詞 a 型>

ma[si:ja: 「よい」

<形容詞 b 型>

[[i: 「よい」]waka:[ha]ru 「若い」

<複合形容詞>

]mi:[du: 「目遠く」

参考文献

- 上村幸雄(1959)「琉球諸方言における「1・2音節名詞」のアクセントの概観」『ことばの研究』1.121-140.
- 小川晋史(2010)「大宜味村津波方言のアクセント体系」『琉球の方言』34.125-174.
- 小川晋史(2012)『今婦仁方言アクセントの諸相』ココ出版.
- 生塩睦子(2010)「沖縄伊江島方言の語アクセント」『沖縄文化研究』11.17-94.
- 金田一春彦(1960)「アクセントから見た琉球語諸方言の系統」『東京外国語大学論集』7.59-80.
- 児玉望(2012)「屋久島の二型アクセント—自発談話音声資料の韻律分析」『音声研究』16-1.119-133.
- 児玉望(2013)「種子島二型アクセントの境界特徴—自発談話音声資料の分析」『熊本大学言語学論集』12.31-50.
- 服部四郎(1937)「琉球語管見」『方言』7-10. 660-681(1-22).
- 平山輝男(1937)「アクセントから見た琉球方言の系統」『方言』7-6.387-421(59-93).
- 松森晶子(1998)「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙 2 拍語の特異な合流の仕方を手がかりに」『言語研究』114.85-114.
- 松森晶子(2000a)「琉球の多型アクセント体系についての一考察：琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方」『国語学』51-1.93-108.
- 松森晶子(2000b)「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発：沖永良部島の調査から」『音声研究』4-1.61-71.
- 松森晶子(2009)「沖縄本島金武方言の体言のアクセント型とその系列：「琉球調査用系列別語彙」の開発に向けて」『日本女子大学紀要. 文学部』58.122-97.
- 松森晶子(2012)「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』16-1.30-40.
- ローレンス, ウェイン(2005)「大宜味村田嘉里方言の音調体系」『琉球の方言』29.67-85.
- ローレンス, ウェイン(2009)「北琉球祖語の名詞音調—試論」『沖縄文化』43-2.86-102.
- ローレンス, ウェイン(2010)「大宜味村方言の音韻について—附 大宜見村四地点音調資料一」『琉球の方言』34.109-124.
- 名護市教育委員会市史編纂委員会(2006)『言語—やんばるの方言』（名護市史本編 10）
- 屋名池誠(2004)「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8-2.46-57.
- 日本放送協会編(1999)『CD-ROM 版全国方言資料』第 10 巻(琉球編 1), 日本放送出版協会